

トランザクション環境下でのオペレータ主導の画面制御方式

5K-10

甲斐 こそえ 菅沼 毅 稗田 隆

NTT情報システム本部

1. はじめに

端末系APの形態として、APの規定するデータフロー上必要な時にデータの入出力を行うAP主導型と、オペレータの画面操作を契機に該当する処理が走りだすオペレータ主導型の2つに分類できる。

AP主導型ではオペレータの入出力に制約がつくので操作性は良いとは言えないが、リソースの管理が容易なため、現状ではトランザクション処理環境で広く使われている。

近年、ホスト系計算機で利用していたトランザクション処理を、マルチベンダのWSで利用しようという要求が大きくなっている。また、WSではGUIが一般的になっている。従ってユーザはトランザクション処理環境において、GUIによるより良い操作性を要求し、その実現のためにオペレータ主導を必要とする。

本稿ではオペレータ主導型の画面制御方式を、マルチベンダのトランザクション処理環境で実現する方式に関して述べる。

2. 目的

オペレータ主導による操作性の良いAPを、トランザクション処理環境においてベンダに依存しない方式で提供することを目的とする。

これを実現するにあたり、トランザクション処理の特性と操作性の向上のバランスを取ることが課題となる。

3. 実現方式

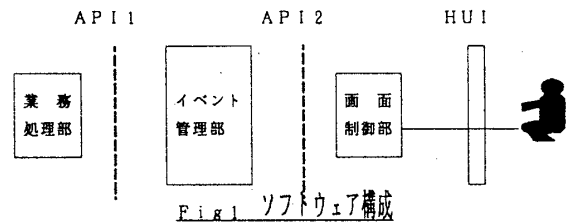
目的の画面制御方式の実現方式について以下に述べる。

3-1 ソフトウェア構成

- ・画面制御部

The Control Method of Graphical User Interface in Transaction Processing Environment
Kozue Kai, Takeshi Suganuma and Takashi Hieda
NTT Information Systems Headquarters

- ・業務処理部
 - ・イベント管理部
- という3つの部分で構成する。(Fig1)



(1) 画面制御部

画面の表示を制御する部分を呼ぶ。業務処理毎にベンダ毎のGUI構築ツール等を利用して作成する。オペレータからの入力によって業務処理部へ処理を要求する。

(2) 業務処理部

業務処理を行うタスクの集合体を呼ぶ。業務処理毎に開発する部分である。

業務処理部全体をひとつのタスクとして扱おうと実質的にAP主導となってしまう、操作性は良くない。このためタスクを分割する。分割したタスクをどのような順番で実施するかは、操作性を良くするためにオペレータが自由に決めることとする。しかし、タスクをトランザクションの範囲を越えて分割した場合には、ひとつのトランザクションが制御を独占して、他のトランザクション処理を阻害してしまう。また、トランザクションの範囲内をオペレータ主導とした場合にも、同様の障害が起こる。これを防ぐため、トランザクションの範囲を越えてタスクを分割してはならず、各タスクの範囲内の処理はAP主導

